

## 解 説

### 『教学誌』所載の「宗教哲学講義」について

今回掲載した徳永（清沢）満之の「宗教哲学講義」は『教学誌』（一八八八（明治二十二年）十二月から一八八九（明治二十二年）四月まで）に掲載されたものである。清沢はの中で「端緒」に続き、本論を内篇十章と外篇十章とに分けた目次をあげている（本文参照）。その目次から判断すれば、掲載分は、内篇・第四章「靈魂滅否論」までとなり、前半の一部であったことがわかる。その続篇については、後述するように現在のところ未詳である。

さて本講義が掲載された『教学誌』は、その第一号が一八八八（明治二十一年）年十二月十日に日本仏教会より発行された。日本仏教会は京都の有志から始まるもので、その会員の仏教哲学独習のために発行されたのが『教学誌』である。同誌記載の種目は講義・論説・問題・雑件の四門に分かれており、「宗教哲学講義」はその「講義」欄に「徳永満之述」として掲載されている。他に第一号に掲載されたものには、「講義」欄に、南条文雄「梵文無量寿経」、佐伯旭雅「俱舍論大意」、上田照遍「起信論義記」、「論説」欄に、心齋道人「仏法論」、「教海遺珠」欄に、青木貞三「素食論」がある。また冒頭には南条文雄によって祝詞が寄せられている。そこには「此誌ニ依テ我仏教ノ学路大ニ開ケ遂ニ文運勃興ノ今日ニ適當ナル教理ヲ発揚スルコトアルヘキヲ信シ鄙意ヲ陳スルコト此ノ如シ」と結ばれ、南条が大いなる期待を『教学誌』に抱いていることがわかる。そして『教学誌』において「我仏教ノ学路大ニ開」くことは、その掲載論文を仏教学に限定することではないとして、「余輩ハ徳永学士ノ宗教哲学ヲ始メトシテ仏学ニ関スル各科ニ及ハント予定シ爰ニ第

一号ヲ発行シタリ」と「本誌発行ノ旨趣」に記されている。ここには仏教学に関する諸学問を積極的に広く取り入れようとする姿勢が窺える。上記の仏教学系の論文の中にあつて清沢の「宗教哲学講義」はこのような役目を担つて掲載されたものと思われる。また日本仏教会は、例言に「講義ハ後日合シテ書籍トスルノ便ヲ図リ各科毎ニ丁数ヲ附ス会員請フ彼此ノ講義ヲ混読スル勿ランコトヲ」とあるように、『教学誌』に掲載されたそれらの講義をやがて書籍とすることを予定していたようである。「宗教哲学講義」の場合、第一号に一〇頁、第二号に十一〜二十頁、第三号に二十一〜三十六頁、第四号に三十七〜四十六頁、第六号に四十七〜五十六頁、第七号に五十七〜六十四頁（頁数は『教学誌』上の数字）というように第三号を除いて、毎号十頁ほどが掲載された。

現在『教学誌』は第一号から第十号までを手にすることができ、五、八、九、十号には「宗教哲学講義」は掲載されていない。第十一、十二号発行の遅れを詫げる文章が第十号にみられるものの、現在までその所在はあきらかになっていない。『教学誌』第一号、第三号から第十号までは龍谷大学大宮図書館、第二号は東京大学史料編纂所明治新聞雑誌文庫にて閲覧させていただいた。

(三浦 統)

### 『哲学雑誌』所載の「宗教哲学骸骨ヲ読ム。」について

立花銚三郎（一八六七—一九〇一）による「宗教哲学骸骨ヲ読ム。」は、『哲学雑誌』第六十九号（一八九二（明治二十五）年十一月）に掲載された清沢満之の『宗教哲学骸骨』（一八九二（明治二十五）年八月）に対する書評である。

『哲学雑誌』（哲学雑誌社発行・於東京）は一八八七（明治二十）年に創刊された『哲学会雑誌』が一八九二（明治二十五）年に改題されたものである。因みに『哲学会雑誌』発刊の基盤となった「哲学会」に、清沢は書記として関わっており、同誌の編集にも携わっていた。さて『哲学雑誌』記載の種目は論説・史伝・批評・解題・雑録・雑報・新著の七門に分かれており、第六十八号（明治二十五年十月五日）の「新著」欄に『宗教哲学骸骨』が紹介されている。そして第六十九号

(明治二十五年十一月五日)の「批評」欄に本書評が掲載された。『宗教哲学骸骨』について稲葉昌丸は「発行所が京都であるので、当時一向世人の注意を惹かなんた様」(Ⅲ・七〇一)だと回想しているが、『哲学雑誌』に紹介され、「批評」欄に採り上げられたことを見れば、一概にそうとも言えないようである。同月二十六日附・人見忠次郎宛書簡の中で清沢(徳永)は「此の頃哲学会雑誌上にも一評を得申候。中々緻密なる批評にて有之候」(Ⅲ・五六四)と書いているが、この「一評」がこの立花銃三郎の批評であると思われる。教育学者であった立花銃三郎は『哲学雑誌』発行元である哲学会の評議員をしており、主に「批評」欄を担当していたようである。訳書として、ダーウィンの『生物始源』(経済雑誌社)や沢柳政太郎との共訳になる『格氏普通教育学』(富山房)などがあった。詳しくは『哲学雑誌』百七十二号「彙報」欄の「故立花文学士」を参照されたい。

(三浦 統)

※ 引用文は暁烏敏・西村見暁共編『清沢満之全集』全八巻(法蔵館)からであり、ローマ数字は巻数を、漢数字は頁を表す。

### 『宗教哲学骸骨』に関する資料について

本誌掲載の「宗教哲学講義」は一八九二(明治二十五年)年八月に出版された『宗教哲学骸骨』(以下「骸骨」と略す)の基礎となった講義と考えられる。この機会にあわせて『骸骨』に関わるその他の資料について紹介しておきたい。

『骸骨』は一八九二(明治二十五年)年八月二十七日、京都法蔵館から出版された。そして翌一八九三(明治二十六年)年五月二十三日には、その英訳として『THE SKELETON OF A PHILOSOPHY OF RELIGION』(以下「SKELETON」と略す)が東京三省堂から出版された。稲葉昌丸はその序文で次のように述べている。

曩者徳永満之君真宗大学寮生徒に宗教哲学を講ずるや稿を草する毎に余の為に其梗概を説く余固より形而上の学に味しと雖ども稍々宗教の何たるを解するを得たり講既に終る余屢々懇願して其説を公にせんことをいふ君遂に勉強して請に応じ其稿

を刪して六章となし以て授く乃ち目次索引を作り印刷者に附す君曰く此稿未だ完からず夫れ宗教哲学の骸骨と謂ふを得ん歟と因て以て名く蓋し皮肉を賦与するは一に読者の選択如何に任せんとす著者に於ては当時其意あらざるなり

明治二十五年八月

稲葉昌丸識す

PREFACE.

Lately Mr. M. Tokunaga has been giving a course of lectures on the philosophy of religion to the students of the Shinshu College. Whenever he finished a lecture-note he told me the outlines of it. Though I am not initiated in the knowledge of metaphysical subjects, I became somewhat acquainted with the nature of religion. The lectures were over and I often advised him to publish the thought. He at length dexterously accepted it and made six chapters out of his lecture-notes and gave them to me. I added the contents and the index to it and send it to the printer. The author says, — “The sketch is not yet complete. Can it be called the skeleton of a philosophy of religion?” Thus the origin of the title. The readers are left free to add flesh and blood as he pleases. The author does not seem to do so at present.

MASAMARU INABA.

August, 25th. Year of Meiji.

これにより、清沢は真宗大学寮で宗教哲学を講じており、稲葉の勧めによってこの『骸骨』が出版されたという当時の事情がわかる。

左表はその『骸骨』を考察する際、参照すべきと思われる資料で、一八九二(明治二十五)年八月に出版された『骸骨』の前後になされた講義、そしてその内容について言及した書簡などを年代順に並べたものである。なお、摘要欄の資料一〜六は、本稿末に掲げた資料の番号である。

											『骸骨』関係資料
											年月日(明治)
											摘要
1	宗教哲学講義	21年12月10日 22年4月5日									『教学誌』第一、四、六、七号掲載。(上欄は同誌の刊行年月日)
2	宗教哲学講義	24年9月18日 25年4月15日									福田正治編『清沢満之の哲学と信仰』所収。「明治二十四年九月十八日—明治二十五年四月十五日」(同書解題)に行われた講義録。
3	書簡(人見忠次郎宛)	25年5月14日									「五月十四日附・京都上京釜座竹屋町下ル亀屋町より・大阪南区北桃谷町百六十一番邸森義三郎方人見忠次郎宛」(Ⅲ・五四九)(資料一)
4	『宗教哲学骸骨』	25年8月27日									明治二十五年八月二十七日発行、発行所法蔵館
5	書簡(人見忠次郎宛)	25年9月15日									「九月十五日附・京都釜座竹屋町下ル亀屋町より・大阪市北桃谷町百六十一番邸森義三郎方人見忠次郎宛」(Ⅲ・五六〇)(資料二)
6	宗教哲学骸骨講義	25年9月7日 26年3月									「明治二十五年九月七日より、二十六年三月に至る真宗大学寮講義・上杉文秀筆記・暁烏敏校合」(Ⅱ・一一二)
7	宗教哲学骸骨自筆書入	25年秋									「明治二十五年秋・真宗大学寮に自著『宗教哲学骸骨』を講ずるための書き入」(Ⅱ・一〇一)
8	書簡(人見忠次郎宛)	25年11月26日									「十一月二十六日附・人見忠次郎宛」(Ⅲ・五六四)(資料三)
9	『THE SKELETON OF A PHILOSOPHY OF RELIGION』	26年5月23日									明治二十六年五月二十三日発行、発行所三省堂 「明治二十六年四月東京三省堂発行・野口善四郎氏によつてシカゴ万国宗教大会にもたらされた」(Ⅱ・一〇〇)(資料四参照)
10	宗教哲学断片	25、26年頃									「明治二十五、六年頃」(Ⅲ・三四一)
11	仏教	26年頃									「先生自用の『宗教哲学骸骨』のうちに挟みありたる紙片に記載・明治二十六年頃」(Ⅲ・四一七)(資料五)

12 南無阿弥陀仏

26年頃

「先生自用の『宗教哲学骸骨』に挟める野紙に手記せられたるもの・明治二十六年頃」(Ⅲ・四一八)(資料六)

※ 摘要欄の括弧内のローマ数字と漢数字は、晁烏敏・西村見晁共編『清沢満之全集』全八巻(法蔵館)の巻数と頁数を表す。また引文中の旧漢字は原則として常用漢字に改めた。

1の「宗教哲学講義」は一八八八(明治二十一年)十二月から一八八九(明治二十二年)四月にかけて『教学誌』に掲載された。今まで確認されている「宗教哲学」に関する「講義」はいずれも他人の筆による講義録であるが、この「宗教哲学講義」には「徳永満之述」とあり、また雑誌に掲載され公になったものである。明治二十一年といえはその年に清沢は東京を引き払い京都に赴き、京都府尋常中学の校長となり、また大学寮で西洋哲学史を講じている。従ってこの「宗教哲学講義」は、京都に赴いた後の最初の宗教哲学の講義と考えられ、その四年後に『骸骨』が出版されていることからも清沢の思想形成の展開を見る上で注目すべき資料と思われる。

2の「宗教哲学講義」は一八九一(明治二十四)年九月十八日から一八九二(明治二十五)年四月十五日にかけての講義を住田智見が筆録したものである。これは福田正治編『清沢満之の哲学と信仰』(黎明書房)に掲載されており、『全集』未収の講義録である。<sup>3</sup>

3と5は二十五年八月に『骸骨』が出版される前後に、その『骸骨』について自らの見解を述べた清沢の書簡である。いずれも友人の人見忠次郎に宛てたもので、人見の評に対する清沢の見解が記されている(資料一、二)。

6の「宗教哲学骸骨講義」は『骸骨』が出版された後の清沢の講義を、上杉文秀が筆記した講義録である。またその講義のために自著に書き入れたものが7の「宗教哲学骸骨自筆書入」である。稲葉昌丸による『骸骨』の序文に「骸骨」の名の由来について述べられているが、それまでの講義は「宗教哲学講義」とあったものが、『骸骨』出版後のこの「宗教哲学骸骨講義」には「骸骨」が付けられている。稲葉は『骸骨』出版当手を振り返って次のように述べている。

師は此の頃熱心に仏典を拜読せられ、殊に真宗の仮名聖教を反覆拜読し、別して『歎異抄』を喜ばれました。又大学寮では宗教哲学を講ぜられ、之は余程力を竭され、私の寓を訪うては講義の要点を話して呉れられました。講義の終つた頃、色々お勧めして講義を出版せんことを請ひましたので、漸く承諾して大いに其の草稿を刪定して渡されましたのが『宗教哲学骸骨』の一冊であります。さて之を出版しました所、此等のことに慣れぬ為、出来上りた本は粗末千万で、紙は悪し印刷は下手、本文は四号文字で四六版百頁といふ小冊子、且つ其の名の如く内容は極めて骸骨的で、余程の肉を付けぬと味が分らぬといふ次第で、加之、発行所が京都であるので、当時一向世人の注意を惹かなかんた様です。(Ⅲ・七〇一)

装丁、印刷が粗悪であり、発行所が京都であるから世人の注目を惹かなかつたことに加えて、内容が「骸骨的」だとしている。十一月二十六日付の人見に当たつた8の書簡(資料三)には、人見の評に対して「只だ小冊には簡約に配説致したるのみなれば、先づ「アレ位」に止め置きたる事に候」としているように、この書は「簡約」した「骸骨的な」内容であるといえる。また当時清沢はいわゆる行者生活を実践しており、「Minimum Possible」をもってせられたる実行(Ⅲ・七〇五)がなされていた。一九〇三(明治三十六)年六月一日、暁烏敏に宛てたいわゆる「最後の手紙」にも「(在京都時)骸骨」(Ⅲ・一七〇)を記しているように清沢にとって「骸骨」は特別の意味を持っていたと考えられる。<sup>4</sup>

9の『SKELETON』は一八九三(明治二十六年)五月に出版された。英訳は野口善四郎によってなされ、一八九三(明治二十六年)五月一日から十月三十一日までアメリカ・シカゴで開かれた「コロンビア世界大博覧会」に付帯した「万国宗教大会」で紹介されている。<sup>5</sup>そして稲葉は野口の英訳について

シカゴの宗教大会の開かれた時、西洋へ持ち行かんとて、野口善四郎氏が此の書を英訳して、師の校閲を請はれましたが、其の訳が余り師の意に適はなんだと見えて、訳者の序文を除く外は、大方自分で新たに訳し、且つ「宗教とは何ぞや」の一章を加へられました。(Ⅲ・七〇二)

と述べている。このことについては『SKELETON』の「ZENSHIRO NOGUCHI」の「PREFACE」には、

The work was finished, the greater part of which was got by the author's assistance. It must be allowed that the arrangement of the paragraphs and chapters is changed from the original by the author himself, and the index is omitted here in the way of translation. But the meaning of the original is not mistaken, on account of the author's superintendent.

とある。またこの「宗教とは何ぞや」の一章を付け加えたことについて清沢は、一九〇二（明治三十五）年九月二十一日付、五十川賢蔵に宛てた書簡にも明記している（資料四）。この書簡にもあるように「CHAPTER I. RELIGION」を新たに付け加え、小節を「1. What is Religion. 2. Definition of Religion. 3. Finite and Infinite. 4. Unity.」とすると、また『骸骨』の「第一章 宗教と学問」を『SKELETON』の「INTRODUCTION. RELIGION AND SCIENCE.」としている。<sup>6</sup>

その他、10の「宗教哲学断片」は『全集』に「明治二十五、六年頃」とある断片をまとめたものである。また11の「仏教」（資料五）、12の「南無阿弥陀仏」（資料六）は清沢の手沢本の『骸骨』に挟んであった紙片である。清沢にとって『骸骨』がどういう意味を持っていたのかについては詳細な検討が必要であるが、晩年楠潜龍に語った言葉に「予は当時、『宗教哲学骸骨』に記する所を以て予の信仰の中心とし」（Ⅶ・五一六）としている。また上杉文秀筆録の「宗教哲学骸骨講義」の最後には「予の宗教説と他の哲学説」、「予の宗教論と他の宗教諸説」とした一節がある。ここで清沢は自らの「骸骨」の説を「予の宗教」、「予の宗教論」としている。この意味においても、『骸骨』に挟まされたこれらの紙片に記された内容は、清沢にとって『骸骨』が「信仰の中心」としての意味を持っていたことを示すものといえる。

（名畑直日児）

1 西村見暁『清沢満之先生』（法蔵館）には明治二十一年九月から二十四年七月まで西洋哲学史を講じたとある（九二頁）。また『全



集』に掲載されている上杉文秀、岡本覚亮筆記の「西洋哲学史講義」(Ⅱ・一八四)は「明治二十三年九月より明治二十六年六月」にかけての講義である。

2 西村見暁『清沢満之先生』には二十四年九月から二十五年七月に亘って宗教哲学を講じたとある。(九二、一一〇頁)

3 『清沢満之の哲学と信仰』に掲載されている本文は名古屋市祐誓寺蔵のものに編集を加えたものである。「編集後記」にはその表記について「できるだけ現代人に親近感を持たせるために、講述の深意が害われることのないように特に留意しつつ、つとめて現代語に表現した。読者はこれを諒とせられたい。」(二三九頁)としている。

4 『全集』三巻の「解説(骸骨時代)」(七五七頁)に西村は清沢の「骸骨」とした内容について次のように記している。

先生がここに、自ら骸骨と名づけられた心は何であろうか。思うに、骸骨という言葉には二つの意味がある。一つは骨格であり、他は屍骸である。骨格は、人体から、皮を去り、肉を除いた骨組であつて、人体がそれによつて支えられている根幹である。だからこの意味で、骸骨の名には物事の核心を把握しなければやまない、真理探究の一心がある。これに対して、人間の最後に至りつく相が屍骸である。生きているものが必ず屍骸になるといふならば、生きているのは屍骸が生きているのである。骸骨の名は生の本質を死に見出された清沢先生の自覚を表わしている。かくて、この骸骨というのは、生死巖頭に立在する真理探究者の名である。…中略…清沢先生にとつて、その統一原理とは真宗の教法、即ち南無阿弥陀仏の一語であつた。それを論理的に解明しようとせられる努力が、『宗教哲学骸骨』を初めとする学問的な思索であり、それを衣食住の實際生活の上に実践せられたのが、行者生活の実験であつた。先生にとつて、前者は真宗真諦門の研究であり、後者は真宗俗諦門の研究に他ならなかつた。これらの研究は、清沢先生の信境展開の過程から見れば、先生自身告白せられるように、獲信以前の探求であり、体験である。しかし、先生はこれら血みどろの所謂自力修行の時代を経過して、初めて他力易行の一道へ出られたのである。そしてこのことは同時に真宗念仏の教法が、真に世界的な立場を獲得する道を開くこととなつたのである。

5 これについては樋口章信「アメリカに渡つた清沢満之の精神―野口善四郎参加の1893 Chicago World Parliament of Religionsをとおして―」(『大谷学報』第七十五卷第二号、平成七年)に詳しい。

また福田正治編『清沢満之の哲学と信仰』の序に鈴木大拙は次のように記している。

清沢師には直接お目にかかたことは無いが、同師の名を始めて聞いたのは、千八百九十三年にシカゴで開催せられた万国宗教大会の時であつた。此大会には自分も間接ながら少し関係をもつて居た。その時『宗教哲学骸骨』と云ふ同師の著書を見た

ことがある。その内容については、今少しも記憶せぬ。が師の如きは、当時にあっては、頗る破天荒の所信をもって居られたのである。明治時代は日本文化史の各方面に涉りて、誠に目覚ましき活躍を見た時代である。何れも新進気鋭の若人達で潑刺たるものが閃めき、まばゆいほどであった。その中で清沢師の如きには、単に知性面だけでなく、意性及び情性面で、深き信念の透徹したものが出て居る。これが今日でも尚生き生きとして、その弟子達の間に見られる。師は実に此方面における一種の天才であったと云ってよい。

6 加来雄之『宗教哲学骸骨』(The Skeleton of Philosophy of Religion)の意義―選択と実験に基づく思索―(『真宗総合研究所研究紀要』第11号1993年)において、“Skeleton”のもつ今日的意義として次の三点を挙げている。

(1) 翻訳者である野口自身が序で語るように、翻訳の草稿に清沢自身がずいぶんと手を入れている。それは全体の構成まで新たにChapter 1を追加したことが示すように、徹底的な校正であったことが伝えられている。その意味で“Skeleton”はほとんど清沢自身の英訳であるといつてさしつかえない。

(2) また清沢の英語の素養は当時の日本人としては一流であり、彼の哲学的素養はフェノロサを始め英語の講義や著作を通して得たものであったと考えられる。また当時の日本ではいまだ哲学の概念の邦訳が確定していなかったことなどを考えると、日本語の『骸骨』よりも英語版の“Skeleton”の方が概念的にはおいては厳密であるといえよう。むしろ『骸骨』はかえって清沢が元来、英語で行った思索を日本語に翻訳したものであるということもできる。

(3) また“Skeleton”は、すでに発刊されていた『骸骨』をテキストとしてなされた高倉学寮での一年間の講義をうけて翻訳されている。その意味で『骸骨』に一層深い検討を与えたものであるといえる。

7 西村見暁『清沢満之先生』(一四四頁)、加来雄之『宗教哲学骸骨』(The Skeleton of Philosophy of Religion)の意義―選択と実験に基づく思索―を参照。

## 資料

一 前略。御評難有拜読。左に略答申上候。p. 34 I. 1 靈魂無体説は靈魂無形説中極端論なり。p. 36 I. 46 真意なり、p. 49 正動を主動とする義再考に譲る。併し英語はactionの積り也。p. 55 ヘーゲル三段軌範の儀御尋ね通り。p. 57 I. 2 亦似たりを、亦

た之に似たりとする儀了承。p. 60 不得思議は創造。英語は矢張り、inconcievable位なり。p. 50 此の姿勢の「の」を省く事了承。善悪質量を善悪量質と改むる事亦た了承。(物理学的の推察は二合以上あると同様? 呵々)、有覚無覚は conscious and unconscious なり。p. 85 1. 2 奇零行は人にわかれは結構。併し極微行との可否再考に譲る。p. 97 8-18 及び p. 47 箇中過の字再版には改正明瞭可被致し。p. 100 分齊は仏者中慣用の語なり。分際との可否再考。p. 101 下段 1. 15 惡の倒植に現に注意せり。然り而して多きは文に拙きの結果、爾後可成注意可致候。昨日は払暁より午前中暴風、夕方暴雨。写真の事は今日字寮にて江村君に聞けり。書翰は来り不申候。御病氣御手当專一に候。尚は何所かにて誰かの批評も有之候はば御序に御報願上置候也。

二 前略 再応御批評鳴謝鳴謝。(一)序文と目録とは製本者の失。(二)絶対を因果と改むること了承。併し此は初めより承知にて致し置きたる事。□經典說神意説の事も同様。此等は両方より意を補ふ積りにてありたり。其では不都合なるや。(三)合果は resultant の積り、(四)平行方形はわからずば致方なし。物理の初歩位は一般僧侶にも心得させ度存居候。(五)p. 38 1. 3 想像の下ピリオドは脱落。(六)p. 18 1. 4 兄甥の事は稲葉氏と打合せの上に譲る。(七)充理の原則は此れ迄に充足真理の原理と訳したる人あり。余り冗長ゆゑ斯く縮めたり。原語は principle of Sufficient Reason なり。(八)自展は selfevolution or selfdevelopment。開発、開展は同意の積り、evolution or development なり。(九)は既出。(十)御推察の通り。(十一)p. 101 1. 6 了承。(十二)Schopenhauer なり。中江篤介氏はスコッペンノールとやらかされたり。(十三)標準確定は全く拙論なり。併し古人中其の意あるや知らず。仏説中には同説と推論しうべき拠ありと信ず。(十四)p. 94 1. 12 どこにあるといふでもなく誰が云ふたでもなし。西国とは中國よりして云ふたもの。(十五)縁の字の当語知らず、Condition or Circumstance 位は如何。○此の他色々御注意辱なし。又病氣恢復御安心被下度候。中学倫理参考書は四書に有之候。乍末御身御大切。

三 此頃は御書簡並びに雑誌、洋書目録御惠送被下奉鳴謝候。陳ば此の頃は中々御多用の御模様定めて寒天御迷惑の義と存候。(中略)偕て『骸骨』中の無限と絶対に配する義は不都合なる也の評は、至極当理の御説と存候。然し、此は初より心得居候事に

て、哲学者の論中には無論其の論議ある事に候。只だ小冊には簡約に配説致したるのみなれば、先づ「アレ位」に止め置きたる事に候。言弁を以てせば、相對絶対と云ふ。其の絶対が其の仮相對に対する一相對に過ぎざる事に相成候。畢竟他の学説は兎まれ角まれ不得思議を思議せんとするは、真理道理に対する人智の謀叛に過ぎざるかと存候。此の頃哲学会雜誌上にも一評を得申候。中々緻密なる批評にて有之候。(以下略)

## 四

久し振りにて貴音に接し、大慶致候。御両親様御無事に候哉。御宜敷く御致声可被下候。

御尋ね越之点々大程は小著『宗教哲学骸骨』に掲げ置候に付、和英各二冊宛別郵にて差上候間、此にて御考究可被下候。弥勒之信心、自力他力云々は見易く云へば、菩薩が弥陀に帰せざりし間は自力なり、弥陀に帰せる以上は他力なり。大経や和漢の文は如何様にも通解し得べし。御一考あらば可なり。宗義は一宗の学丈にて充分とは云ふものゝ、為人悉檀(教人信)等の場合には眼界の広きを要す。然らざるときは、兎角局僻に陥り易きなり。此には哲学が最良薬なり。仏教内にては華天等、一乗家の学問が是非必要なり。

右略荅迄。忽々不備。

九月廿一日

満之

賢藏殿

『骸骨』中宗教定義の一章は、英訳の節加へたるものゆゑ、和文の内には欠略。又和文の第一章宗教心の論は、英訳にては緒言となれり。其の外和英全く一致なり。不尽。

〔東京本郷森川町二〇より・五十川賢藏宛〕(Ⅷ・五五)

## 五

1 [「仏教」]

南無阿弥陀仏

機法一体

心境不二

色即是空空即是色

一色一香無非中道

心仏及衆生是三無差別

煩惱即菩提 生死即涅槃 一断一切断

一即一切一切即一 真如是万法是真如

万法唯識

三界唯一心 生仏一如

依正不二

十界互具 主伴無尽

事々無碍

一心法界 攝在一刹那

三諦円融

娑婆即寂光土 迷悟不二

理事無碍 染浄一如

是心是仏 一切衆生悉有仏性

諸法実相

艸木国土悉皆成仏 一念三千

本来無一物 本来は有限なり

無一物は無限なり

六 2 「南無阿弥陀仏」(一)

南無者帰命、亦是発願回向之義、 阿弥陀仏者即是其行、

以此義故必得往生。

南無者有限也、 阿弥陀仏者無限也、

故南無阿弥陀仏者有限無限之一致也。

南無者機也、 阿弥陀仏者法也、

故南無阿弥陀仏者機法一体也。

南無方法也、 阿弥陀仏者真如也、

故南無阿弥陀仏者方法是真如也。

南無者色也、

阿弥陀仏者空也、

故南無阿弥陀仏者色即是空也。

南無者一色一香也、

阿弥陀仏者中道也、

故南無阿弥陀仏者一色一香無非中道也。

南無者衆生也、

阿弥陀仏者仏陀也、

故南無阿弥陀仏者生仏一如也。

南無者差別也、

阿弥陀仏者平等也、

故南無阿弥陀仏者差別即平等也。

南無者人也、

阿弥陀仏者神也、

故南無阿弥陀仏者神人合一也。

南無者事也、

阿弥陀仏者理也、

故南無阿弥陀仏者事理不二也。

南無者一念也、

阿弥陀仏者三千也、

故南無阿弥陀仏者一念三千也。

南無者生死也、

阿弥陀仏者涅槃也、

故南無阿弥陀仏者生死即涅槃也。

南無者煩惱也、

阿弥陀仏者菩提也、

故南無阿弥陀仏者煩惱即菩提也。

南無者一切衆生也、

阿弥陀仏者悉有仏性也、

故南無阿弥陀仏者一切衆生悉有仏性也。

南無者汝等所行也、

阿弥陀仏者是菩薩道也、

故南無阿弥陀仏者汝等所行是菩薩道也。

南無者資生產業也、

阿弥陀仏者実相也、

故南無阿弥陀仏者資生產業与実相不違戾也。

南無者現象也、

阿弥陀仏者本体也、

故南無阿弥陀仏者体象不一不二也。

南無者始覚也、

阿弥陀仏者本覚也、

故南無阿弥陀仏者始覚本覚還同一致也。

南無者修也、

阿弥陀仏者性也、

故南無阿弥陀仏者修性不二也。

南無者主観也、

阿弥陀仏者客観也、

故南無阿弥陀仏者主客一致之知識也。